

## 自然環境教育としての野鳥観察の実践

### ー山口県下関市周辺のフィールドを中心としてー

田 中 俊 明

#### 1. はじめに

野鳥は、人間に身近な生き物である。鳥は人間と同様、主に昼間活動して空を飛ぶために発見しやすく、人間とほぼ同じ範囲の波長や色や音を感じとっているため、人間は鳥の鳴き声や色の特徴に共感しやすい(山岸, 2002)。また、野鳥は、野山に限らず、街中でも公園でも、いつでもどこでも誰にでも観察できる。野鳥の観察を通して、自然環境教育を行うには、さまざまな視点が考えられるし、多くの利点がある(田中, 印刷中)。

本研究では、山口県下関市周辺の野鳥観察に適したフィールドを紹介しながら、自然環境教育としての野鳥観察実践の方法を提案する。なお、各フィールドで紹介した鳥は、そのフィールドでしか見られないというものではなく、下関市周辺に限らず似たような環境の他の場所でも見られるので、ほかの地域でも応用可能である。また、各フィールドでは、そこで観察できる全ての野鳥ではなく観察に適した野鳥のみを紹介した。

#### 2. 下関市周辺の環境と野鳥

下関市は、本州と九州の境、本州側の最西端に位置する。内陸部は、華山山地(狗留孫山、華山など)、豊浦山地(鬼ガ城、竜王山など)、霊鷲山、火の山など低山が連なり、全体として起伏のある地形が広がっている。関門海峡、周防灘、響灘と三方が変化ある海に面しており、角島、彦島、蓋井島など島嶼もある。豊田湖、湯の原ダム、内日ダムなどの湖もある。木屋川や神田川などの河川も擁し、その河口部は周防灘に面し瀬戸内海有数の干潟として知られている。下関市の長府から山陽小野田市の埴生まで約20kmの海岸線沿いに広がる干潟は、最大3mの干満差により沖合2kmにも達し、干潟面積は754haにもおよぶ(山口県環境生活部自然保護課, 2004)。これら下関の山陰側、山陽側、内陸部は、野鳥の渡りのコースになっている。また、下関市近辺には、宇部市の小野湖、美祢市の秋吉台、山口市のきらら浜自然観察公園を中心にした阿知須干拓周辺や山陽小野田市の厚狭川河口など、野鳥観察の絶好のポイントがある。1970年以降、下関市で確認された鳥は53科290種(留鳥46種、夏鳥29種、冬鳥102種、旅鳥113種)で、そのうち渡り鳥が84パーセントを占めている(下関市教育委員会, 1998)。下関市は、留鳥に加えて、地理的に多数の渡り鳥が観察できる場所であるといえる。

#### 3. 下関市周辺の野鳥観察のフィールドと野鳥観察実践の方法

神田川・木屋川河口周辺(渡り鳥、水辺の鳥、農耕地の鳥)、火の山公園・霊鷲山・彦島老の山公園(市街地・公園の鳥、渡り鳥)、彦島竹の子島・角島(海辺・岩礁の鳥、渡り鳥)の3つの野鳥観察フィールドとそこで観察できる野鳥を紹介しながら観察実践の方法を紹

介する。なお、以下の野鳥を紹介するに当たり、叶内 (1986a, 1986b)、蒲谷ほか (1996a, 1996b)、樋口ほか (1996)、樋口ほか (1997)、桐原ほか (2000)、五百沢ほか (2004)、山岸 (2004)、山口県環境生活部自然保護課ほか (2004)、叶内 (2006) などを主に参考にした。

### 3.1 神田川・木屋川河口周辺 (渡り鳥、水辺の鳥、農耕地の鳥)

神田川・木屋川河口周辺は、瀬戸内海有数の干潟が広がっている。干潟の泥・砂地の環境には、ゴカイ、貝類、カニなど様々な底生生物が生息しており、水鳥や魚の重要な生息場所となっている。春と秋の渡りの季節には、さまざまなシギ・チドリ類の姿を見ることができる。海に面した地上には農耕地が広がっている。この農耕地でも、たくさんの鳥たちを見ることができる。乃木浜、白崎、工領開作 (西糸根、東糸根) には、ため池と用水路がある。このため池には、わずかながらヨシ原が残り、ヨシを利用する野鳥をはじめさまざまな生き物を育てている。フナやコイなど魚たちが群れ泳ぐ姿が見られる。天気の良い昼の水際では、クサガメやスッポン、アカミミガメ (外来種) などが日向ぼっこをしている。冬のため池は、カモ類の宝庫である。また、乃木浜にはヨシ原を中心とした湿地の造成が行われ野鳥観察所が設置されている。農道や防波堤の脇の道を散策しながら、干潟、ヨシの残るため池、農耕地の環境とそこに生きる野鳥をはじめとしたさまざまな生き物同士の関係を観察するにはとてもよい場所である。

シギ・チドリ類。春と秋、干潟やため池や用水路の浅瀬や湿地などには、たくさんのシギ・チドリ類が飛来する。春と秋では、同じ種でも夏羽から冬羽に羽の色が変わっている様子が見られることもあるので比べてみるとよい。また、ここでは留鳥のシギ・チドリ類も観察できる。一般に、シギのなかまは嘴が長く、歩きながら嘴を泥の中に入れ、ゴカイやカニなどをつまみだして食べる。同じ長い嘴でも、まっすぐに伸びているもの、下に曲がっているもの、上にそっているものなどがいるので、その違いに注目してみよう。チドリは、シギよりも短い嘴をもち、くりっとした可愛くて大きな目をもつ。大きな目でゴカイなどを探し、見つけるとちょこちょこ走り寄って捕らえて食べる。食べ終わると、また周囲を見回し、餌を見つければ走り寄って食べる。いそがしそうに右に左に立ち止まっては走り、立ち止まっては走りをくり返す様子は、まさに「千鳥足」のゆえんの通りである。潮の引いた干潟を眺めると、大型のシギであるチュウシャクシギやハウロクシギがゆっくりと歩きながら下に湾曲した長い嘴でカニをつまんで食べているわきで、ハマシギ、ダイセン、トウネンなどのチドリ類が群れてせわしなく動き回っている対照的な姿が見られるだろう。トウネンは、シギ類の中ではもっとも小型でスズメくらいの大きさに見える。漢字では「当年」となる。成鳥になってもその年生まれのように小さいことが名前の由来だという。このように鳥の名前の由来とその鳥の姿形・行動の特徴をあわせて考えてみる面白さだろう。トウネンは、小さな体をしているにもかかわらず、春と秋の二回の渡りでシベリアとオーストラリアを往復し、約 24000 キロもの長旅をする。トウネンは、警戒心があまり強くないので、餌を採るのに夢中になって私たちのすぐ近くまで来てくれるかもしれない。「ビリー」と鳴きながら旋回飛行し、いっせいに方向転換するハマシギの大群やとりわけ目の大きなメダイチドリが「クリリリッ、クリリリ」と鳴いて飛ぶ群れが見られることもある。干潟のわきの砂地のところでは、シロチドリが砂にうずくまっているかわいらしい姿が見られるかも知れない。ため池や用水路の浅瀬では、チドリ類の中では小

型で、額から目を通る線と首の部分がえりまきのように黒く目の周りが黄色いとぼけたような顔をしたコチドリ。脚の黄色いキアシシギ、黄緑色の脚を持つアオアシシギ。脚の色の違いに注目しよう。杭などにとまってよく腰を振っている地味な姿のイソシギ。顔から腹にかけて黒色で、頭から背にかけては茶色のまだら模様、その間の眉から脇胸にかけての白い部分が「？」の形に見えるムナグロ（夏羽のオス）など、春と秋にはたくさんのシギ・チドリ類に出会うことができる。運がよければ、ショッキングピンクの細くて長いスマートな脚をもつセイタカシギ。全身まっ黒（夏羽）で赤い脚、背が高く小型のツルのようなツルシギに出会えるかも知れない。それから農耕地では、後頭にそりあがった黒い冠羽、金属光沢のある濃い緑色の背中を持つ煌びやかで凛々しい姿の大型のチドリ類、タゲリの群れを見られるだろう。農耕地や用水路の草陰で周りの背景に溶け込んでじっとしているタンギに気付くだろうか。鳥は一般にオスのほうが派手だが、メスのほうが派手な羽色を持つ不思議な鳥、タマシギに運がよければ出会えるかもしれない。シギ・チドリ類のなかには、数千キロ、数万キロの長距離を旅する旅鳥が多い。春と秋の東の間のあいだを日本で羽を休める小さな姿を眺めて、国境を越え、海を越えて地球をまたにかける鳥たちのたくましい生きざまを想像してみよう。

カモメ類。秋から冬にかけて、海側の上空や海面に目をやるとカモメ類の姿が目にとまるだろう。背中と羽が薄い灰色で、黄色い嘴の先に赤い斑のあるセグロカモメは、最もよく見られる種である。嘴の先の赤斑は、雛が親鳥から餌をもらうためのスイッチだ。雛がそこをつつくと親鳥が餌を吐き戻すことがノーベル賞学者のN. Tinbergenによって観察されている。そんな話を子どもたちに聞かせてみると興味が増すだろう。嘴の先に注目してみると、赤斑に加えて黒斑のあるカモメが見つかるかもしれない。黄色い嘴の先に赤と黒の斑があるのは、ウミネコである。名前のおおネコのように「ニャーオ」と鳴くので、セグロカモメの「クィーツ」という声とちがいを比べてみよう。セグロカモメやウミネコよりも小型で、嘴と脚の赤色が目立つカモメに会ったら、それはユリカモメである。「名にし負はばいざこと問わむ都鳥わがおもふ人はありやしやと」とは在原業平の歌であるが、和歌で詠まれてきた都鳥とはユリカモメのことである。ユリカモメは、都の鳥にちなんで東京都の都民の鳥に指定されている。都鳥をはじめ、さまざまな野鳥の生き生きとした姿を題材にして、子どもたちに和歌や俳句などを作らせて遊んでみるのもよい。子どもたちの中に、対象をよく観察して表現する力、自然を愛でる感性を育むことにつながるだろう。なお、ミヤコドリという和名を持つ別種の鳥（後述）がいるので注意しよう。ユリカモメはヘリコプターのようにホバリングが得意である。空中に停止して魚などに狙いを定め、見つけると水面すれすれを飛び回り水中の魚を捕らえる様子を観察してみよう。ユリカモメの夏羽は、覆面をかぶったように顔から頭にかけて黒くなるのでよく目立つ。黒い覆面にのぞく、キョロリとした目はなんともひょうきんである。

カモ類。冬場のため池や河口付近には、カモ類がたくさん飛来する。ここで見られるカモたちは、越冬中につがいを形成する種が多いので、メスを魅了するための美しく鮮やかな羽にはえかわったオスを観察することができる。一方、メスは地味な色をしたものが多いので、オスとメスの違いに注目してみよう。大げさな身振りをしながら、メスに美しい羽をきわだたせるカモ類のオスの求愛誇示行動にも注目してみよう。まず大群で目立つのはマガモであろう。マガモのオスは、ハンターから「青首」と呼ばれているが、頭と首の部分が光沢のある深緑色をしており、黄色い嘴とのコントラストがとても美しい。オスの求愛誇示の行動は集団で行われる。複数のオスが1-2羽のメスの周りを泳ぎ回り、嘴でメ

スに水をかける行動をした後、首を上には伸ばしながら甲高い声で鳴き、急に首を縮め水の中に顔をつけて尻を水面から高く上げるという行動をする。カモ類の中では小型のコガモ、オスも地味な羽色をしているカルガモ、針のように細長い尾が目立つオナガガモ、顔から首は茶色で額から頭頂にかけてクリーム色をしたヒドリガモなど、他のカモ類の求愛誇示行動も見られるので、どんなカモが、どんな求愛誇示をするのか観察してみると面白いだろう。求愛のときに、笛の音のような声で鳴くこともあるので、鳴き声にも注意してみよう。さて、ため池で数は少ないがひときわ姿形が目立つのは、白い顔をして目のまわりに黒いふちどりがあるパンダのような顔をしているミコアイサ（オス）である。ミコアイサは、主に水中の魚類や貝類を食べるため、潜水をよくする。他に潜水をするカモ類としては、黄色い目をして脇腹から腹部だけが白く他は黒で後頭部に飾り羽をもつキンクロハジロ、赤い目に頭から首にかけての茶色が目立つホシハジロ、キンクロハジロに似るが頭部は深緑色で鈴のような羽音を立てて飛ぶ（聞いてみよう）というスズガモ、頬の白い白斑が目立つホオジロガモなどが観察できる。一方、マガモ、オナガガモなどは、潜らないで水面で逆立ちをして水草などを食べる。また、ひときわ幅の広い嘴を水面につけて食物をこしとるハシビロガモも観察できる。水面で採餌するカモ類と潜水して採餌するカモ類の体形と飛び立ち方の違いに注目してみよう。前者は、脚が体の中央についており、陸で体が水平になる。また、助走なしで飛び立つことができる。後者は、脚が体の後ろについており、陸で体が起きる。助走をしないと飛び立つことができない。このように、多くの野鳥は、習性や生態に対応した様々な姿形をしているので、その違いに注目して餌となる生物との関係やその生息環境の様子を調べてみると面白いだろう。ところで、カモ類の大群をみていると、時々、ちょっと変わった個体に出会うときがある。ヒドリガモに似ているけどどうもヒドリガモではない。アメリカヒドリにも似ているような気がする。自然界では、異種同士が交雑することはまれであるが、カモ類では、比較的多く交雑が起こるようである。大群の中から、交雑個体を探してみよう。また、カモ類の大群を眺めて、いつもの種類ばかりだと安心してはいけない。大群に混じって、珍しいカモに出会えるかもしれないからだ。カモ類に限ったことではないが、時々、本来ならば山口県には立ち寄らないはずの迷鳥に出会うことがある。野鳥観察の面白いところは、いつも決まって同じ鳥に出会うとは限らないし、ときどき思いもよらなかった鳥に出会うこともある点である。どんな鳥に出会えるかある程度予想はつくが、最終的にどんな鳥に出会えるかは分からないのである。偶発的な性質を持つ問題に直面することが人間の脳にとっていちばんの栄養になるということが言われているが（茂木、2005）、そういう意味ではまさに野鳥観察は脳にとってよい刺激になると思われる。

下関市の内陸部の豊田湖や湯の原ダムでは、神田川・木屋川河口周辺では見られないオシドリなど山間部の湖沼に飛来するカモ類が見られる。なお、下関のとなりの宇部市にある小野湖は、日本国内でも有数のオシドリの越冬地として知られている。オシドリのオスは、あまたいるカモ類の中でもとりわけ派手な色模様をもつ。先が白いピンクの嘴、目の上から冠羽にかけては白、暗緑色から栗色になる頭部、栗色の頬の羽、茶色の首、暗青色の胸、側胸に黒と白に2本の帯、橙色の銀杏羽など非常に派手な羽色をしている。メスは全体的に灰褐色でオスに比べて地味であるが、目のまわりに白いアイリングがあり、目の後ろに白い線が続いており、なかなか粋な姿をしている。オスとメスが、水際の流木などに止まって休んでいる姿は、なんと風流である。ここでも一句、俳句でもひねってみたい。オシドリは雑食性ではあるが、特にシイ、カシ、ナラ類などのどんぐりを好んで

食べる。オシドリが木に登ってどんぐりを食べる姿を見られるかもしれない。オシドリのオスは、メスの前で、冠羽を大きく広げ、橙色の銀杏羽を垂直に立てて求愛誇示を行うので、観察してみよう。また、メスがオスの顔に嘴を寄せる行動も見られるかもしれない。オシドリ夫婦とは、仲のよい夫婦の代名詞となっているが、実際のところは抱卵期ごとにつがいを解消し、毎年別の相手とつがうことも普通にあるようである。人間は、つい動物に対しても人間の道徳観や感情を当てはめてしまいがちであるが、生き物たちのありのままの姿をありのままに認識することが、環境教育においては重要なことであると思われる。ヒトも生き物の一種であり、そうした生き物たちのありのままの姿の観察の中から、新たな人間観が立ち現れてくるかもしれない。なお、オシドリは、山口県のレッドデータブック（2002）によれば準絶滅危惧種に指定されており、県内の主要な生息環境であるほとんどのダム湖は、近年、エンジン付きボートの乗り入れなどにより、安定した越冬地ではなくなっており、越冬数が減少したり、ほとんど飛来しなくなったダム湖もあるそうである。オシドリに限らず、セイタカシギ、カラシラサギ、カラスバト、ヘラサギ、クロツラヘラサギ、オオタカ、ヒシクイ、ハヤブサ、シロチドリ、ホウロクシギ、カイツブリ、クロサギ、マガン、ミサゴ、ハイタカ、ハチクマ、チョウゲンボウ、オオバン、ヒクイナ、タマシギ、ミヤコドリ、ウミネコ、ヒバリ、コマドリ、オオルリ、サンコウチョウ、ホオアカなど本論文で紹介した野鳥（後述の鳥も含む）のなかにも、山口県で絶滅の恐れのある種が多数いる（山口県、2002）。ある地域に生息する野鳥の変化は、その自然環境が変化していることを示してくれるので、こうした野鳥たちが実際に生きて動いている姿を観察し続けることを通して、下関市の自然環境の変化に子どもたちの目を向けるという教育は、地域に生きる人間として必須のものであり非常に重要なことであると考えられる。

ガン類。冬のため池や農耕地では、運がよければ、カモ類に混じってはるかに大きくて迫力のあるマガンやヒシクイに出会えるかもしれない。「竿になり、鉤になり」といったように、一列やV字型の隊列を組んで飛ぶガン類の姿は、多くの詩歌にも詠まれ、一昔前までの日本人々に親しまれてきた。しかしながら、下関市では残念ながら隊列をいつも見られるほど数は多くなくなってしまったようである。

カイツブリ類。ヨシ原付近や用水路のおなじみさんは潜水名人のカイツブリである。あちこちでちょこちょここと潜っては、水中で小魚を追いかける姿が観察できるだろう。「キュルルルルルル」という独特のよく通る鳴き声で鳴くので、どんなときに鳴いているか注目してみよう。春になるとカイツブリは、オスメス共同で、ヨシなどの茎を支えにして、水草など植物の茎などを集めて水面に浮く巣をつくる。巣を見つけたらカイツブリを脅かさないように遠くからそっと観察しよう。春から初夏にかけて、産卵から育雛まで通して観察してみるとよいだろう。抱卵中は、親鳥が巣を離れるときは卵を草などで隠す行動が見られる。雛は孵化すると、すぐに泳ぐことができる。雛が疲れると親の背に乗って休むすがたはかわいいものである。ヘビなどの天敵が近づくと親は雛を背中に乗せたまま潜水する。雛にはまだ魚を捕れないため、生後2ヶ月くらいの間は、親は雛へ魚などを嘴から嘴へ給餌する姿が観察できるだろう。しかし、その後、雛を追い回して独立を促す子離れ行動がみられる。カイツブリの他には、人里近くで営巣するツバメ、カラス、スズメなどで、親鳥の繁殖と雛の成長のドラマを春から夏にかけて観察できるだろう。ため池で見られるカイツブリ類としては、カイツブリよりもはるかに大きいカンムリカイツブリが見られるかもしれない。その名のとおり赤褐色と黒の冠をかぶったような飾り羽（オス）を持ち、王様のように悠然と泳いでいる。

クイナ類・ウ類。ヨシ原の周りでは、先が黄色く真っ赤な嘴と額をもつバンやそれとは対照的に真っ白な嘴と額をもつオオバンを見ることができる。バンは、ヨシ原の根元に水草などを集めて巣をつくるので、カイツブリのように比較的容易に、親鳥の繁殖と雛の成長のドラマを春から夏にかけて観察できる。興味深いのは、最初の雛が巣立った後、同じ年に親鳥は次の繁殖を始めるが、その時に、先に巣立った若鳥が、弟や妹に給餌して子育てを手伝うことがあるのである。こうした繁殖のシステムは協同繁殖、親の繁殖を手伝う個体はヘルパーと呼ばれている (Stacey ほか, 1990)。日本では、バンのほかにオナガやエナガなどくらいで、このような繁殖システムをもつ鳥は非常に少ない。バンのヘルパーを探して、家族の起源に思いをめぐらそう。ヨシ原の中には、全体に灰色を帯びた褐色のクイナやレンガ色の体に赤い脚をもつ、まさに火のような色のヒクイナがすんでいる。しかしながら、これらの鳥たちは、ヨシの茂みの中に潜んでおり姿が見られることはまれである。もしクイナやヒクイナに出会えたら、そうとうラッキーである。その日一日は、いい気分でいられるだろう。それからカワウを忘れてはいけない。ため池の岩や棒杭に止まって、翼を広げて日向ぼっこをしている姿を見かけるだろう。カラスのように黒い体に、エメラルド色の目は印象的である。これは、水鳥でありながら水をはじく脂肪が少なく、羽が濡れやすいためといわれている。ついでに、カワウの脇で、休みながら尾羽の付け根に近い部分にある脂をだす腺（尾脂腺）に口を持っていき、脂をぬって羽づくろいをしているオナガガモなどのカモ類の休憩シーンも眺めてみよう。

サギ類。ため池や用水路、農耕地では、コサギ、チュウサギ、ダイサギ、アマサギが見つかるだろう。きわめてまれにカラシラサギが見られる。アオサギは、日本では最大級のサギ類であり迫力がある。水辺に佇む姿は、頭頂部がちょんまげが外れて剃髪がむき出しになった落ち武者のようになっており、不気味に見えることもあるし、ときには深遠な思索にふける老哲学者のようにも見えることもある。体が大きい割には、結構警戒心が強いので、近づくとすぐに飛び立ってしまう。乃木浜の野鳥観察所の湿地で営巣しているので、繁殖の姿が観察できる。一般に、体の白いシラサギのなかには、小型のコサギ、中間のチュウサギ、大型のダイサギがいるので注意してみよう。コサギは、片足で水中をかき回し、獲物を追い出してとる姿が面白い。サギのなかまは、畑で人間がトラクターで耕作する後ろに群がり、土の中からでてくる小動物を待ち構えてとることもある。このように人と野鳥との関わりに注目して人と野生生物の共生について考えてみよう。春から夏にかけてアマサギの夏羽は、頭から首、胸にかけて亜麻色になる。春の農耕地に咲く野草の花畑の中で餌を探すアマサギの姿はとても幻想的で美しい。水辺のヨシの脇や木の陰に目を向けてみよう。赤い目に青っぽい背中をしたゴイサギがまるで置物のようにじっと佇んでいる姿が目に入るかもしれない。油断して近づいてくる小魚などを待っているのだ。ゴイサギの幼鳥は、ホシゴイと呼ばれており、親と違って、黄色い目に体全体が茶褐色で黄白色の斑点がある姿をしており、周囲の背景に溶け込むみごとな保護色になっている。このように野鳥の親子の姿形に注目してみると面白い気付きがあるだろう。

猛禽類。冬のため池や河口付近では、オオタカ、ハヤブサ、ハイタカなどが、水辺のカモを狙って急降下すると、それまで平穏だった水辺が騒然となる。一斉に飛んで逃げるカモたちを追いかける姿を観察できることも結構ある。何度も観察していると、どうも毎回狩りに成功するというわけではなく、結構失敗することも多いようである。狩るほうも狩られるほうも、生き残るのはつらいことのようにだ。冬だけでなく、一年中見られる猛禽では、トビとミサゴがいる。上空を見上げてみよう。上昇気流を利用して、羽ばたかずに翼

を広げたまま帆翔しながら旋回する大きな鳥が目に入るだろう。見つけたらまずは尻尾に注目してみよう。尾の先端が平ら、もしくはVの字に内側にくぼんでいたらそれはトビである。尾が、扇形ならば、今度は翼の下面や腹の色を見てみよう。白かったら、それはたぶんミサゴである。なお、翼の下面や腹の色が白っぽい猛禽類は、下関市では他にノスリが冬に見られるが、もっと内陸の山地や里山に多いことが多い。ミサゴは、魚以外を食べることはない。運がよければ、ミサゴが、水中に足からダイビングして魚を捕らえるシーンを目撃できるかもしれない。今度は、農耕地のほうに目をやってみよう。農道に沿って立つ電線に、チョウゲンボウがとまっているかもしれない。しばらく見ていると、飛び立ってヘリコプターのようにホバリングして畑に潜む昆虫などを探して、急降下して捕らえる姿が見られるだろう。冬の木屋川・神田川流域では、他にチュウヒやコミミズクに出会えるかもしれない。猛禽類を観察しているとき、スズメなどの小鳥たちやカラスたちが群れになって攻撃するモビング（擬攻撃）行動が見られるかもしれない。ただし、カラスのモビングは、モビングというより同じ資源を争う種間のなわばり防衛的な本当の攻撃行動であるかもしれないことが指摘されている（上田，1990）。いずれにしても、本来は弱いはずの鳥たちが、群れになって猛禽類を攻撃する姿は、興味深い。

モズ類。秋から初頭にかけて、電線や木の上など見晴らしのよいところで、尾を上下左右に振りながら、大音量で「キー、キー、キー、キー、チキチキチキ、ギン、ギン」といった声で鳴く鳥を見つけたら、それはモズである。モズの高鳴きと呼ばれ、なわばり宣言に機能しているといわれている。オスは、ギャングのような黒いサングラスをかけたようにみえる過眼線をもつ。オスとメスの違いに注目してみよう。モズは、小枝などに獲物を突き刺しておくはやにえを行う鳥としても知られている。いつどのようなものがはやにえにされ、そのうちどのくらいのもが後で食べられているのか調べてみるのもいいだろう。

キジ類。農耕地では、日本の国鳥であるキジの姿を頻繁に目にすることができる。オスは、顔に赤い皮膚が裸出しており、首は光沢のある黒紫色、その下は光沢のある黒緑色、羽は青灰色で、肩羽は茶色に黄色と灰褐色の模様がある。尾は灰褐色で黒い斑点があり長い。とにかくカラフルである。春の繁殖期に「ケーン、ケーン」と鳴いた後、「ドドドドド」&#x2D;とほろ打ちと呼ばれる羽ばたき音を出す。黄色い菜の花畑の中を1羽のオスが複数のメスを従え、裸出した赤い皮膚のある顔を膨らませて頭を下げ、翼を半開きにしてメスにアピールする姿はみごとである。その一方で、こそこそと畑の作物を盗み食いしている国鳥の姿はなんとも悲しいものがある。キジに限らず、人間と野鳥の間で、様々なトラブルが生じている。こうしたトラブルを観察したり調べたりすることは、子どもたちが人間と野生生物との共生のあり方を考えたり、自分たちが暮らす地域環境を理解するのによい契機となるだろう。

ツグミ類。秋の農耕地では、昆虫を探す、たくさんのツグミを見ることができる。そんなツグミを見つけたら、歩き方に注目してみよう。まず、胸を張って周りを見渡して外敵を警戒する。その後、両足をそろえてぴょんぴょん跳ねる（ホッピング）、さらにその後、足を交互にだして歩きながら（ウォーキング）餌を探す。鳥の歩き方には、大きく分けてホッピングとウォーキングがある。ツグミのように両方するものもあるが、どちらかしかない鳥もいる。歩いている鳥を見たら、どちらなのかに注意してみると面白い。他のツグミ類としては、春と秋の渡りの季節にノビタキが見られるだろう。春はすぐに移動してしまうようだが、秋は比較的のんびりしているようだ。セイタカアワダチソウ（外来種）

やコスモス（外来種）の花にとまるノビタキを探してみよう。

ヒバリ類。春、風の穏やかな晴れ上がった日、ヒバリは、上空に舞い上がって翼を震わせて羽ばたきながら「ピーチブ、ピーチブ、チュルル、チュルル、チィー、チィー、リュ、リュ」など変化に富んだ複雑なさえずりを、テンポが速く抑揚が激しい節回しでさえざる。このヒバリの舞を見ながら美しいさえずりを聞くと、今年も春が来たなあをつくづく感じる。ヒバリは、農耕地でたくさん見られる。ヒバリによく似たタヒバリもいるので注意してみよう。

ウグイス類。春から秋にかけての水辺や農耕地の草むらでは、セッカが上昇と下降を交えた波状飛行をして、なわばり内をせっかちに飛び回りとでもせわしない。上昇するときは「ヒッ、ヒッ、ヒッ、ヒッ」と鳴き、下降するときは「チャッ、チャッ、チャッ、チャッ」とさえずりを変えるのが特徴的である。また同じ時期のヨシ原では、ヨシの茎の先端付近に直立してとまり「ギョギョシ、ギョギョシ」とオオヨシキリが盛んにさえずっているだろう。朝から晩まで、本当によく鳴いて賑やかである。この鳴き声は、「行々子」と聞きなされ、昔からこの鳥の代名詞となっており、詩歌の中にたくさん登場しており、一昔前までの日本人にはなじみの深い鳥のひとつである。しかしながら、オオヨシキリはヨシ原という限られた環境のみ生息するため、山口県も含み全国的に土地利用の進行や河川改修にともなってヨシ原が急激に減少している現在では、なじみの薄い鳥になりつつあるようだ。

ホオジロ類。春から夏にかけての農耕地では、木のとっぺんなどで「一筆啓上仕り候」と聞きなされるホオジロのさえずりを聞くことができる。他にも違った聞きなしができるか、子どもたちにオリジナルの聞きなしを作らせてみるとよいだろう。言語感覚を磨くことに貢献するかもしれない。ここでは、頬の白いホオジロに対して、頬の赤いホオアカも見ることができる。ホオアカの頬の赤色は、子どものほっぺのように赤く印象的でかわいいので、ぜひ探してみよう。

アトリ類。秋から冬の農耕地では、アトリの大群が観察できる。「集鳥（あつとり）」がつまって「アトリ」となったそうで、大群で移動しながら採餌するのが特徴である。ワラワラとやってきたかと思うと、ひとしきり食べてまた別の場所へ移動していく。オスは、頭が黒く、橙と黒のコントラストがきわだつ体色がなかなかカッコいい。

春から夏にかけての農耕地では、ツバメが、たくさん見られる。数回羽ばたいた後に翼を広げてすべるように滑翔しながら空中で虫を捕らえる姿を観察してみよう。よく見てみるとおなじみのツバメではないことがあるかもしれない。ここでは、ツバメのほかに、コシアカツバメが観察できる。コシアカツバメは、ツバメよりひとまわり大きく、比較的直線的に飛ぶ。名前の通り、腰の部分が赤く、目の後ろ側が赤色をしている。両種とも、下関の市街地や里山に営巣するので、巣を見つけたら親鳥の繁殖と雛の成長を観察してみよう。なお、下関市の内陸部では腰の白いイワツバメを見ることがある。

以上、神田川・木屋川河口周辺の野鳥についてみてきたが、山口市のきらら浜自然観察公園を中心にした阿知須干拓周辺や山陽小野田市の厚狭川河口でもここと似たような野鳥たちが観察できる。こちらには、嘴がヘラのような形をしたとても珍しいヘラサギやクロツラヘラサギが飛来することでも知られている。きらら浜自然観察公園は、観察施設も整っており、解説員も常駐しており、鳥の解説をしてくれるので、子どもたちの学習には最適である。

3.2 火の山公園・霊鷲山・彦島老の山公園（市街地・公園の鳥、渡り鳥）

火の山・霊鷲山地域や彦島の老の山公園は、渡りのコースとなっており、市街地・公園の鳥に加えて、たくさんの渡り鳥が観察できる。ヒヨドリ、サシバ、ハチクマなどの渡りが観察できることで有名である。火の山・霊鷲山地域は、特別鳥獣保護区に指定されている。どちらの場所も遊歩道が整備されており、下関市街から近いので、散歩がてらに野鳥観察するにはちょうどよい場所である。

ウグイス類。ヒバリと並んで春を知らせてくれる鳥は、ウグイスである。「ホーホケキョ」のさえずりは、あまりにも有名である。この声に続いて「ケキョ、ケキョ、ケキョ、ケキョ」と鳴く声は、谷渡りと呼ばれており、警戒音だといわれているが、そうでないという説もある。いずれにしても、ウグイスの声を聞くと、春の明るさを感じてすがすがしい気分になる。ウグイスは、コマドリ、オオルリとともに日本三鳴鳥に数えられている。美しい声とは裏腹に、体は全体に模様はなく、地味な褐色をしており、普段は藪の中においてなかなか姿を見せない。一般にウグイス色といわれているのは、メジロの色であるらしい。冬に、藪の中から突然「チャッ、チャッ」という声が響き渡ることがある。これもまたウグイスの声で、笹鳴きと呼ばれている。笹鳴きが聞こえたら、ウグイスが顔をだしてくれることもあるので、その藪に注意してしばらく待ってみよう。他に見られるウグイス類としては、日本の鳥の中では最小のククイタダキがいる。一円玉5枚程度の重さしかない。この鳥は、針葉樹につく虫などを好んで食べる。冬、老の山公園にある松の林などで耳を澄ませてみよう。「チッ、チッ、チリッ、チリッ、チリッチッチ」<sup>1</sup>と金属的な小さな声が聞こえてくる。声を追いかけると、小さなククイタダキがせわしなく枝移りしながら採食している姿を見つけることができるだろう。金属的な響きに耳を傾けながら、小鳥たちの姿を目で追っていると何ともいえない不思議な気持ちができる。頭頂部が黄色い菊の花びらのような色模様をしていることから「菊戴（ククイタダキ）」という名前がついたといわれている。

メジロ類・カラ類・エナガ類・キツツキ類。火の山や老の山公園には、ウメやツバキやサクラなどがたくさんある。これらの花が咲く季節、花から花へ蜜を求めて渡りあるくメジロの群れを観察できるだろう。植物は鳥に蜜を与える代わりに、受粉を助けてもらう。メジロが蜜を吸う様子を観察することを通して、鳥と植物の間に成立している、持ちつ持たれつの自然界の共生関係を理解することができるだろう。花の蜜が好きな鳥としては他にヒヨドリがいる。メジロは、鮮やかなウグイス色をしており、目の周りに白い輪がありかわいらしい姿をしている。「チーチュルチーチュル、チーチュルル」<sup>2</sup>とさえずりもかわいらしい。カラ類では、シジュウカラとヤマガラがいる。シジュウカラでは、なわばりの境界付近で、二羽が向かい合ったまま体を伸ばし、喉から腹にかけて縦に入ったネクタイのような黒い模様を目立たせるといったことをする。木のてっぺんなど目立つ場所で「ツーツーピー、ツーツーピー、ツーツーピー」とよく通る声でさえずる。争いをするのはオスなのかメスなのか、どんな争い方をするのか、いつの時期に見られるのかなど、鳥の争いに注目してみるのも面白いだろう。また、さえずりの場所や争いの起きた場所を地図に記録し縄張りの広さやその時間的変化を調べてみるのも面白いだろう。ヤマガラは、警戒心が薄くとても人なつこい鳥で、「ジッ、ジッ、ニー、ニー」と鳴きながら人間のすぐ近くまで寄ってくる。餌の木の実などを枝にとまりながら両足で押さえてつく姿がかわいい。木の実などを木の割れ目などに入れて貯めておく、貯食の習性が知られている。エナ

ガは、名前の通り、体の半分以上の長い尾をもつ。頭から腹にかけて白く、黒くて太い眉斑は背までのびる。肩羽と脇腹から尾の下側にかけて薄いピンク色をしていて愛らしい。よく観察するとまぶたもピンクに見える。卵型の体形をしており、ふかふかの綿毛で覆われているように見える。声は体に似合わず濁った声をしており「ジュリ、ジュリ」と鳴きながら、小さな群れで木から木へと渡り歩く。キツツキ類では、日本のキツツキの中では最小のコゲラがいる。「ギョーッ、ギョーッ」という声を出しながら、木を幹から枝にかけてらせん状に登りながら採食する様子に注目してみよう。春先の繁殖期には、枯れ木をドラミングして「トロロロロ」という音を響かせる。火の山・霊鷲山地域では、運がよければ、頭上と口の脇が赤く、背中から尾にかけて緑色をしたアオゲラに会えるだろう。歩道を歩いているときに「キョッ、キョッ」という少し濁った大きな声がしたら、その声をたよりにアオゲラの姿を探してみよう。冬の火の山や老の山では、シジウカラ、ヤマガラなどのカラ類に、メジロやエナガやコゲラが混じり、異種同士の混群をつくり、木から木へと賑やかに移っていく様子をよく見かける。静かだった場所に混群がやってくると急に賑やかで楽しくなるが、去ってしまうと急に静かになってさみしくもなる。

ヒタキ類・小型ツグミ類。この種の鳥たちは、一般に目がくりっとしてとても可愛い。この地域の春には、姿も声も美しいオオルリとキビタキに出会えるだろう。オオルリ（オス）は、腹は白く、頭から背中にかけて光沢のある濃い瑠璃色に輝いている。「ピールーリー、ジジ」という美しい声が、木のでっぺんから響き渡る。キビタキ（オス）は、オオルリとは対照的な美しさをもつ。頭から尾にかけて黒く、喉から腹にかけて橙がかった黄色をしており、翼に白斑をもつ。黄色と黒のコントラストが強烈に印象に残る。「フィーフィリー、フィッフィーフィ」と木の中間の小枝などにとまってさえずる。4月ごろの火の山と老の山では、両種の声が響き渡り、その中にいると心地よく心が洗われたようになる。春の渡りのこの時期には、「ヒンカララララ」とコマドリの声も聞くことができるかもしれない。ただ、コマドリは藪の中でさえずるのでなかなかその赤茶色の美しい姿を拝ませてはくれない。秋から冬にかけては、ジョウビタキが主役になる。オスは、ヘルメットをかぶったように頭頂から後頭部にかけて青みがかかった灰白色、喉は黒、胸と腹は橙色、黒い翼に白斑が目立って美しい。この鳥は人なつこい鳥で、比較的近くでじっくりと観察できる。枝などにとまっているとき、しきりに頭を下げて尾を上下に振るしぐさをする。「ヒッ、ヒッ、ヒッ、ヒッ」と一定間隔で鳴く。冬の火の山では、まれにオオルリとはまた違った光沢のある淡い瑠璃色をしたルビタキに会えるかもしれない。腹は白く、脇は山吹色をしており、背中中の淡い瑠璃色とよく合っている。もしこの鳥に出会えたら、その可憐な美しさに魅了されて、冬の寒さもいっぺんに吹き飛ばしてしまうに違いない。これらの種は、オスはそれぞれ派手な色をしているが、メスは地味な色をしており、みな似ている。

大型ツグミ類。ツグミをはじめ、脇腹が橙色のアカハラ、腹が白っぽいシロハラ、などが冬に観察できる。アカハラに似るがはっきりした黒い眉斑のあるマミチャジナイは旅鳥で春秋に見られることもある。地面の落ち葉を掻き分けながらごそごそと餌を探すこれらの鳥たちを見つけてみよう。

セキレイ類・タヒバリ類。冬の老の山の芝生では、ウォーキングしながら昆虫などを探すオリーブ色のビンズイに会えるだろう。その脇では、白と黒または灰色のツートンカラーのハクセキレイが、長い尾を上下に振り下ろしながら同じように餌を探しているかもしれない。これらの鳥は、開けた場所が好きなようだ。なお下関市の川や小川などの水辺の

開けた場所には、ハクセキレイと形は似ているが、頭と背中が黒いセグロセキレイや胸から腹にかけて黄色いキセキレイも見ることができる。

アトリ類。この仲間は、種子や木の実を食べるのに適した太い嘴をもつ。この地域のアトリ類の代表選手はカワラヒワであろう。体全体がオリーブ色をしており、飛ぶと翼の黄色い帯がよく目立つのでスズメと区別できる。「キリキリ、コロコロ」と鈴を転がすようなきれいな声で鳴く。ひまわりの種が好物で、庭などに植えておくと種子を食べにやってくるだろう。冬になると、カワラヒワよりも小型のマヒワの群れがやってくる。頭頂部が黒で、体全体が黄色く見える小さくてかわいい鳥である。冬も中盤を過ぎる頃、火の山や老の山にあるサクラの林から、「フィー、フィー」という声が、一定間隔で聞こえてくるだろう。この声の主は、やや太めの体形をしたウソである。オスは、頭と尾が黒く腹と背は灰色で全体的に暗い色をしているが、一点、頬がピンク色をしており、暗い体色によく映えて美しい。サクラの蕾が大好きなので、桜の木の近くを探せば見つかりやすい。他に、火の山周辺では、黄色い嘴が目立つイカルやいかにも頑丈そうな太い嘴をもつシメに会えることもあるだろう。

レンジャク類。秋には、下関を通過するヒレンジャクに出会える。ヤドリギの実や赤い木の実に群がる。後頭斜め上に伸びた冠羽をもち、過眼線は黒く冠羽の縁まで続くエキゾチックな顔立ちをしており、体は淡褐色で、尾の先の赤が目立つ。一度出会ったら忘れられない印象の強い姿の鳥である。よく似た姿で、尾の先が黄色いキレンジャクにも出会えるかもしれない。レンジャク類は、木の実を食べると、その種子を遠く離れた場所に糞と共に排泄するという種子散布を行う種である。レンジャク類を観察しながら、鳥と植物をはじめ生き物同士の共生について考えてみよう。

ムクドリ類。芝生や開けた地面付近を、黄色い脚で歩き、黄色い嘴で採食するムクドリの姿は見慣れたものである。頬と脇の白い模様がよく目立つ。秋から初冬には、夕方になると数百から数千羽の群れとなって電線などに集まり、ねぐらに帰る姿には圧倒される。鳴き声は、「キュルキュルキュルル」と以外に良い声をしている。

ヒヨドリ類。秋になると、北海道や本州で繁殖したヒヨドリは南下する。10月上旬から中旬にかけて、本州沿いを南下してきたヒヨドリは老の山を通過して彦島南西部にある大山(112m)に集まり次々に九州へと渡ってゆく。南西部の下関南霊園からは、数百羽の群れが関門海峡を海面すれすれに渡っていくのが見られ、その様子は圧巻である。ハヤブサなどの猛禽が、ヒヨドリを狙って群れに突入していくダイナミックな光景も目撃できるかもしれない。ヒヨドリやムクドリをはじめ、鳥の群れを観察して、鳥はなぜ群れるのか、考えてみよう。

ハト類。茂みの中で「デ、デ、ポッポー、デ、デ、ポッポー、デ、デ、ポッポー」と鳴いているのはキジバトである。頭、胸、腹はブドウ色を帯びた灰色、翼には褐色と灰鼠色の模様、首の横にはコバルトブルーと黒の模様がある。全体的に地味な色をしているが、渋い美しさがある。飼い鳥が野生化した、いわゆる公園のハトであるドバトのいる場所から少し離れた樹木などが茂った場所にいることが多い。これらのハトは、繁殖期に限られず、1年中、オスが胸を膨らまし尾を広げて、おじぎをするような動作をしながらメスに求愛する姿を観察できる。なお、他のハト類としては、下関市の蓋井島には、レッドデータブックやまぐち(2002)で、絶滅危惧Ⅱ類に指定されているカラスバトの生息が確認されている。カラスのように黒い色をした珍しい鳥である。しものせき自然生態系サポートワーク(NPO)が、カラスバトの保護活動を行っている。そうした人たちから、子ど

もたちが話を聞く機会をつくってやれば、環境保全の意識を高めるのによい機会となるだろう。

カラス類。この地域では、主に市街地に住むハシブトガラスがみられる。一方、下関の山間部ではハシボソガラスをよく見かけるだろう。ハシブトガラスは、「カー、カー」と澄んだ声で鳴き、ハシボソガラスは、「ガー、ガー」と濁った声で鳴くので、聞き分けてみよう。これらのカラス類は、ゴミをあさったり、農作物を食べてしまったりなど、人間とトラブルを巻き起こしている。カラスと人間のトラブルを観察するのは、子どもたちに地域環境の問題を考えるよい機会となると思われる。

### 3.3 彦島竹の子島・角島（海辺・岩礁の鳥、渡り鳥）

彦島の竹の子島の岩礁地帯には、数羽のミヤコドリが越冬することで知られている。ミヤコドリは、ニンジンのような朱色の縦に薄い嘴をもった奇妙な鳥である。この縦に薄い嘴を、二枚貝の貝殻の間に差し入れてこじ開けて食べる。他に、岩礁地帯では、体全体が黒いクロサギも見られるだろう。また、北極海沿岸で繁殖し東南アジアやオーストラリアで越冬するというキョウジョシギが、長い旅の途中、岩場で羽を休めている姿を見られるかもしれない。短くやや上にそった嘴で石などを転がして、カニなどを探すしぐさを観察してみよう。海辺の大型のツグミ類であるイソヒヨドリもよく見られる。オスは、頭から尾にかけて青色と腹のレンガ色とのコントラストが美しい。

角島は、日本海側の渡りのコース上にあり、春の渡りの季節には、上述したようなツグミ類、ホオジロ類、ガン類、カモ類、シギ・チドリ類などの冬鳥の渡りとヒタキ類などの夏鳥の渡りが同時に観察できる。春には、運がよければ薄いオレンジ色に白と黒のまだら模様をもち頭にインディアンのような冠羽をもつヤツガシラなど珍しい旅鳥がみられることもある。秋に、サシバ、ハチクマ、ハイタカなどの猛禽類の渡りが観察できる場所としても有名である。また、冬の海上には、アビ、オオハム、シロエリオオハムなどアビ類、ウミアイサはじめさまざまなカモ類、ウミネコなどのカモメ類も見られる。岩礁地帯では、ウミウ、クロサギ、ミサゴ、イソヒヨドリ、ハヤブサなどが見られる。春と秋には、多数のシギ・チドリ類も立ち寄る。海岸付近のマツなどでは、冬場にキクイタダキも見られるだろう。角島は、渡り鳥を観察するには格好の場所といえるだろう。

## 4. まとめ

以上、神田川・木屋川河口周辺、火の山公園・霊鷲山・彦島老の山公園、彦島竹の子島・角島の3つの野鳥観察フィールドとそこで観察できる野鳥を紹介しながら自然環境教育としての野鳥観察実践の方法を提案してきた。上記の視点に基づいた野鳥観察の実践により、子どもたちの中に自然の具体物に接してよく観察するという態度が育まれると考える。また、そうした観察の経験を通して自然に対する愛着が生まれると思われる。その後には、自然をもっとよく知りたいという探究心が生まれるであろうし、自然を愛でる感性、自然を守りたいという保全の態度が育まれてゆくだろうと考える。

文献

- 五百沢日丸・吉野俊幸・山形則男 (2004) 日本の鳥 550 山野の鳥. 文一総合出版.
- 樋口広芳・山岸哲・森岡 弘之(編) (1996) 日本動物大百科 3 鳥類 I. 平凡社.
- 樋口広芳・山岸哲・森岡 弘之(編) (1997) 日本動物大百科 4 鳥類 II. 平凡社.
- 蒲谷鶴彦・松田道生 (1996a) 日本野鳥大鑑 鳴き声 333 〈上〉. 小学館.
- 蒲谷鶴彦・松田道生 (1996b) 日本野鳥大鑑 鳴き声 333 〈下〉. 小学館.
- 叶内拓哉 (1986a) 日本の野鳥 100 ①水辺の鳥. 新潮社.
- 叶内拓哉 (1986b) 日本の野鳥 100 ②野山の鳥. 新潮社.
- 叶内拓哉 (2006) 絵解きで野鳥が識別できる本. 文一総合出版.
- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸 (2000) 日本の鳥 550 水辺の鳥. 文一総合出版.
- 茂木健一郎 (2005) 「脳」整理法. 筑摩書房.
- 下関市教育委員会 (1998) 下関の野鳥. 下関市教育委員会.
- Stacey, P., Koenig, D. (Eds.) (1990) Cooperative Breeding in Birds: Long Term Studies of Ecology and Behaviour. Cambridge University Press, Cambridge.
- 田中俊明(印刷中) 自然環境教育としての野鳥観察. 梅光学院大学子ども未来研究, Vol.2
- 上田恵介 (1990) 鳥はなぜ集まる? -群れの行動生態学-. 東京化学同人.
- 山岸哲 (2002) オシドリは浮気をしないのか. 中公新書.
- 山岸哲 (2004) 聴いて楽しむ野鳥 100 声 野鳥おもしろ雑学事典. インプレス.
- 山口県環境生活部自然保護課 (2002) レッドデータブックやまぐち. 山口県環境生活部自然保護課.
- 山口県環境生活部自然保護課・第 58 回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」記念誌編集委員会 (編) (2004) やまぐちの野鳥 第 58 回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」記念誌. 第 58 回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」山口県実行委員会.